

アングロ・サクソン時代の歴史劇

—— *Edmund Ironside, or War Hath Made All Friends* の場合 ——

佐野隆弥

Irving Ribner の指摘に拠れば、アングロ・サクソン時代——5世紀中期の西ゲルマン族の大ブリテン島への来襲・定着から1066年の「ノルマン人の征服」までの期間——の歴史に取材した歴史劇は、広義のエリザベス朝演劇において2本現存している。¹1595年に創作されたと推定される作者不詳の *Edmund Ironside, or War Hath Made All Friends* (以下、*Edmund Ironside* と略記) および推定創作年が1618年の Thomas Middleton 作 *Hengist, King of Kent, or The Mayor of Queenborough* の2作品がそれに該当し、²本稿では前者の戯曲を分析の対象として取り上げるが、先ず最初に *Edmund Ironside* の創作年について解説を加えておきたい。先に言及した「1595年」という年代は Alfred Harbage が本作品に配当した創作年をそのまま表記したものであるが、同時に Harbage は *Edmund Ironside* の創作年代に1590年から1600年と10年もの幅を持たせている。本劇に関する先行研究も Harbage 同様この10年間に創作の上限と下限としているが、その一方で1590年前後（あるいは1590年代初期）の創作を措定するものが多く、³本稿の立場もそちらの見解に与するものである。

Edmund Ironside は1016年の大ブリテン島南部の政治状況を劇化した作品であるが、本劇の政治的メッセージを理解するためにも、アングロ・サクソン時代の歴史的展開の概略を押さえておこう。先述したように、5世紀中期にジュート人が来襲しケント王国を建国、以降サクソン人やアングル人が陸続と来襲し、先住民族のブリトン人を駆逐しながら王国を建国してゆく。6世紀中期にはいわゆるアングロ・サクソン7王国 (Heptarchy) が成立し、以後抗争と興亡を繰り返すが、829年にウェセックス王 Egbert がイングランドの統一をほぼ達成し大王となる。しかしその一方で、8世紀後半にはデーン人が初めて大ブリテン島に上陸し、これ以降波状的に来襲を重ね、9世紀後半にはヨーク王国を建設、Alfred 大王との争いを経て、遂に991年のモールドンの戦いでデーン人はイングランド王 Ethelred II the Unready (本劇の主人公の1人 Ed-

mund II王の父王)の軍を大破する(イングランド史で通常使用される‘Danelaw’とは、この9世紀から10世紀にかけてのデーン人の法律並びに彼らの勢力圏を指す)。この後デンマーク王Sweyn I Forkbeard(本劇のもう1人の主人公Canutus王の父王)は数度イングランドを侵攻し1013年にはイングランド王と認定され、息子のCanutusも1016年には同様にイングランド王に選出されたが、ロンドン市のみEdmund IIを王に推挙したため(第3幕第2場でのCanutusの“new Troy”(3.2.864)入城拒絶がまさにこれに該当する)、『CanutusとEdmundの間に覇権争奪の戦いが開始される。Edmund Ironsideが描出を試みるのはおよそ半年間にわたる両者のこの闘争なのである。

CanutusとEdmundの戦争は、史実に拠ればEdmundが統治した僅か7ヶ月の間に5度戦われ、Edmundは3度勝利を収め2度敗れている。そしてこの2度の敗戦およびEdmundの急死そのものもEdric Streona(本劇のマキアヴェリアンEdricusの原型)⁵を始めとする貴族の裏切りによるものとされている。またEdmund Ironsideの結末部との関連で見逃せないのは、アシンドンの戦いでEdmundは大敗を喫し、その後の和解でCanutusからウエセックス、エセックス、イースト・アングリアの支配のみ許可されたという事実である。この事項は、EdmundがCanutusを下した後に友愛を結び、イングランドを分割統治するEdmund Ironsideの大団円とは大きく異なる訳であるが、この点に関しては後述する。

では、作品Edmund Ironsideの重要な項目を順次検証してゆこう。先ず戯曲構成の観点から注目すべきことは、主要な登場人物が極めて対称的に配置されている点であろう。Edmund王とCanutus王という2人の君主の覇権争いを描く本劇にあっては、この対称性という特徴はある意味で当然ではあるのだが、イングランド人(正確にはサクソン人)対デーン人という対立ではなく、イングランド側の忠実な臣下対イングランドを裏切った背信の臣下、という設定が際立っているのである。すなわちEdmundの元には忠誠揺るぎなきAlfric以下の将軍と将校およびYork大司教が廷臣団を構成する一方、Canutusの元にはデーン人の将校と並んでイングランドに背を向けたSouthamptonとCanterbury大司教が脇を固めるよう配当されている。そしてCanutusに組みしながらも両王を天秤にかけ、日和見的に常に自分の有利になるような位置取りに専心するEdricusが、狂言回しのアクションを引っ張る仕掛けが施されているのである。

さて、こうした人物配置の対称性と相乗効果を上げるよう工夫されているのが、両国王の君主としての道徳的評価である。Edmundは立派な体格で武勇に優れ、臣下や兵士への配慮や思いやりまた報償を欠かさず、寛大さ(magnanimity)を体現する存在である。その具体例として、一旦は敵方に寝返っていたChesterとNorfolkの帰順を、Edmundが放蕩息子の諭えを用いながら暖かく許可する場面に言及するだけで十分であろうし(第1幕第3場)、このような聖書への言及はEdmundの美德を示すのみならず、キリスト教的徳性をも彼に付与するものであろう。他方Canutusの人物描写はEdmundのほぼ正反対と言ってよい。体格は劣り、敗戦の際には部下の臆病さを激しく叱責し、逃亡したChesterとNorfolkの息子たちの手と鼻を切り落として見せしめとする残酷さを持ち、Edricusの追従にも容易に動かされる。しかし、言うまでもないことだが、*Edmund Ironside*は勸善懲惡、白黒明白な道徳劇ではない。EdmundにもEdricusの偽善を見破れぬ人間的な弱さがあるし、Canutusにもそれ相応の人間味——例えば第2幕第1場におけるEginaへの求愛の場に見られるような——がある。留意すべき点は、本劇にあってはこれら2人の国王の道徳面での対称性もさることながら、その対称性をも包み込んでしまうEdricusの悪が存在するという点である。ほぼ完全に近い王としての徳性を与えられているEdmundを惑わし過ちへと導くのがEdricusの欺瞞であれば、暴君的人物像を付与されるCanutusの鼻面を引っ張り回すのもEdricusの虚偽と追従なのである(そしてそれ故にCanutusの悪が相対化され、そのことでCanutusに人間味が生ずるという効果がある)。

*Edmund Ironside*における重要な政治的メッセージは、上述のごとく、人物配置と道徳的評価が明瞭な対称性を持たせて提示されていることから判明するように、すべてEdmund王およびイングランド側から語られ、他方Canutusらデーン人とCanterbury大司教やEdricusは他者化され、引き立て役へと格下げされている。そしてその操作の狙いは、一言で言えば外国軍の残忍さの強調とカトリック性の付与ということになる。

そもそもEdmundとCanutusが統治権をかけて覇権を争う根拠としては、前者の血統による王位継承に対して、後者は占領による土地の実効的支配から生ずる領主権・地主権に頼らざるを得ない。第5幕第2場で両国王が舞台上で対峙し、土地所有に関する法律問答となった時、Canutusはいみじくも征服による所有を主張するが、Edmundはそれに対する反論として“Nay, you and Sveyn your gripple-minded dad / … / did first intrude yourselves and

then extrude / our woeful subjects from their native home” (5.2.1823, 1826-27) と切り返す。そして臣民が住み慣れた土地を追われる際には悲惨な情景が当然のように繰り広げられることになる：

They prey upon thy[=Edmund's] subjects cruelly
like hungry tigers upon silly kids
sparing not ancient men for reverence
nor women for [their] imbecility
nor guiltless babes for their unspotted life
nor holy men, their madness is so rife. (4. 1.1348-53)

この引用は6万ものデーン人の大軍が海岸に殺到した様を使者が Edmund に報告する際の描写であるが、残酷さの強調としてはいささか常套的ではあるものの、逆にステレオタイプを活かした一定の効果を上げていることも否定できないであろう。⁶

では次に、カトリック性の付与の問題に移ろう。*Edmund Ironside* の創作年代が先行研究の多くが推定するように1590年に近い場合、劇中におけるカトリック的要素の存在は1588年のスペイン無敵艦隊撃破という史実と密接に関連することは言うまでもない。つまり真のキリスト教信仰の、そしてイングランド国家の敵としての位置付けである。本劇にあっては Canterbury 大司教と Edricus という2人の Canutus 陣営のイングランド背信者がこれに該当し、Edmund 王に付与されたキリスト教的徳性とも相俟って、*Edmund Ironside* の観客の愛国心を喚起する結構になっている点は見逃されるべきではない。(ただ本劇の場合、こうした部分が散発的で局所的なために、作品全体の意味として有機的に提示できていないことも事実である。)

Canterbury 大司教のケースでは、第3幕第1場での York 大司教との対決が興味深い。Canterbury は York に対してローマ教会内での位階が上位であることを理由に服従を要求し、受け入れない場合は呪いをかけるとの脅しを与えるが、York は Canterburyこそ神と正統な王に対する謀反人だと論駁する。Canterbury が教皇を中心としたカトリックのヒエラルキーにこだわる一方、York の指定する信仰体系は神と神の直接の代理人としての国王を中軸としたものであって、明らかにプロテスタント的意味を担わされている。Canterbury が Edmund を裏切るよう強要する時、York は “Oh let me die whenas I leave

my king, / a true-born prince, for any foreigner.” (3.1.853-54) と拒絶するが、ここには外国人国王への警戒と自国の王への忠誠そして国内勢力の求心的団結を謳う愛国的な言説が背後に控えているのである。⁷

Canterbury と York の対決がカトリックとプロテスタントの争いを基にした緊迫感のある場面であったのとは対照的に、Edricus が絡むシーンはいささか笑劇的な描写が与えられている。第4幕第1場、大敗に落胆した Canutus の歡心を買うべく Edmund の宮廷に変装して潜入した Edricus は、正体を暴露された時、自分が王から好意的に評価されていないならばイングランドを去りスペインに渡って巡礼と祈りと瞑想の日々を送るつもりであると述べる。他人を欺くことを生業とする Edricus がこのような空々しい見え透いた敬虔さを装うことは、彼の悪党ぶりをより一層印象付け、しかもその渡航先に当時の第1級のカトリック大国であるスペインを名指しすることで、観客の持つスペインへの敵愾心と Edricus の悪徳が増幅効果を持ち得たことは想像に難くない。

Edmund Ironside には、こうしたネガティブな表象を通してのデー人サイドの他者化の一方、Edmund 王自身の口から発せられるポジティブなイングランド表象も当然のことながら存在する。その最も典型的な例は、(1) Edmund が舞台に初めて姿を現し2人の叛逆貴族の帰順を喜んで迎え入れてやる際に語る “England, … / … / for thou shalt never perish till that day / when thy right hand shall make thy heart away.” (1.3.377, 379-80) と、(2) 両軍が初めて戦火を交え Canutus が敗走、その後を受けての Edmund の勝利宣言 “Praised be the eternal bulwark of this land, / the fortress of my crown, in Whom I trust, / that hath thus discomfited my foes / by His omnipotent all-conquering arm.” (3.4.1019-22) との2つである。神が嘉し天然の要塞イングランドと、国王への揺るぎなき忠誠によって団結した無敵の存在としてのイングランド、という国家像は、*Edmund Ironside* と同時期に創作されたイングランド史劇には馴染みの、ステレオタイプとしてのイングランド表象には違いない。だが、後述する大団円での史実改変と併せて考慮すれば、やはりここには劇作家のイングランドへの肩入れ（もしくは観客の愛国心への訴求を意図した操作）を感じない訳にはいかない。

では、問題の結末部改変について考察しよう。先述したように、史実では、アシンドンの戦いで決定的な敗北を喫した Edmund はその後の和平交渉で Canutus からイングランドの1部のみ領有を許されたのであるが、本劇の作

者はこの敗北を国王同士の一騎打ちでの Edmund の勝利へと180度転回してみせる。ただし、これは *Edmund Ironside* における独創ではない。この戯曲の材源は Holinshed の年代記であり、その記述をかなり忠実に使用している。関連する部分を引用してみよう：

But perceiuing he[=Canutus] could not find aduantage, and that he was rather too weake, and shrewdlie ouermatched, he spake to Edmund with a lowd voice on this wise: “What necessitie (saith he) ought thus to mooue vs, most valiant prince, that for the obteining of a kingdome, we should thus put our liues in danger? ... Let vs become sworne brethren, and part the kingdome betwixt vs: and let vs deale so friendlie, that thou maist vse my things as thine owne, and I thine as though they were mine.” ... After this, there was an agreement deuised betwixt them, so that a partition of the realme was made, and that part that lieth fore against France, was assigned to Edmund, and the other fell to Cnute.*

興味深いことに、Holinshed はこの合意を “our common writers” によるものと記し、彼自身はここに続く数段落で Edmund の敗北と Edmund からの和平の申し出並びに分割の提案を記述している。

Edmund Ironside の作者は Edmund の敗北ではなく Edmund の勝利を選択し、しかも Canutus の口からではなく Edmund 自身の口から、“Edmund is thine, his thine, himself and all” (5.2.2007) と驚くべき発言をさせ、友人として友情を競い合おうとさえ語らせる。そしてそれに輪をかけたようなさらに気前の良い、互惠的ではない Edmund からの一方的な申し出がなされる：

Yourself[=Canutus] shall choose which part you think is best
the east or west, the right hand or the left.
My court is yours, my councillors are yours
my friends your friends, thy foe my enemy
my people yours, my treasure and myself
all are your own, for you shall all command. (5.2.2041-46)

この現実離れしたとさえ言いうる提案には、もちろん Edmund の王としての度量の大きさを示すことで、彼の美德を印象付けるという劇作家の意図が存在するのであろう。そして、イングランド王の勝利と雅量を終幕に同時に舞台上に呈示することを通して、イングランドを言祝ぐという作者のメッセージをわれわれは受け取るべきなのであろう。⁹

しかし、ここでドラマが終幕を迎える訳ではない。タイトル通りの友愛を謳歌する2人の国王の背後では、息子を虐待された Chester と Norfolk の復讐の怨念と、一騎打ちが思わぬ展開を見せ目論見が不発に終わった Edricus の両王に対する復讐の眩きが、幕仕舞いに暗い影を落としている。そして何にもまして観客に暗澹たる不安を抱かせたのは、Edmund の国土分割の台詞であろう：“Now, noble lords, let us like friends consult / upon partition of this noble isle.” (5.2.2039-40)。もちろんこの分割は史実通りの記述であり、また国土の分割譲渡対象者も、内乱が危惧される血族間のものではない。だが、それにもかかわらず、やはりこのイングランド分割には *Gorboduc* (1562) 以来の歴史劇が繰り返し戒めてきた王国分割の響きが確かに存在する。悲劇の到来は実はこれからなのかも知れないのである。Edricus が罰を受けることもなく、また友愛と和平と悲劇的予兆が奇妙に入り交じるこの結末に、Ribner が現存しない続編の存在を感じ取ったのも自然なことであろう。¹⁰

注

- 1 Irving Ribner, *The English History Play in the Age of Shakespeare* (New York: Barnes and Noble, Inc., 1965) 226.
- 2 戯曲の推定創作年代は原則としてすべて Alfred Harbage, *Annals of English Drama 975-1700*, rev. S. Schoenbaum (London: Methuen and Co. Ltd., 1964) に拠る。Harbage は *Edmund Ironside* を *Edmond Ironside* と表記しているが、エリザベス朝演劇史においてもイングランド政治史においても一般に前者が使用されているので、本稿もそれに従う。
- 3 例えば、Ribner, 241や *The Cambridge Companion to English Renaissance Drama*, eds. A. R. Braunmuller and Michael Hattaway (Cambridge: Cambridge UP, 1990) 425などを参照。
- 4 *Edmund Ironside* からの引用はすべて *Shakespeare's Lost Play: Edmund Ironside*, ed. Eric Sams (London: Fourth Estate, 1985) に拠る。
- 5 Edricus の劇的機能を探る上で興味深いのは、彼が独白で自らのことを“yet I can play an *Ambodexter's* part / and swear I love, yet hate him with my heart.” (1.2.330-31) と定義し、*Cambises* (1561) に登場する二枚舌の悪党に言及している点である。また Edmund も Edricus のことを“*Policy*” (4.1.1365) と呼んで

いる。Edricus は明らかに Vice の系譜に連なる人物である。

- 6 例えば、*Lochrine* (1591) にも同様の描写が存在する。佐野隆弥、「リチャード三世劇の系譜——1580年代および90年代前半におけるセネカ流歴史劇と国家表象——」、『文藝言語研究 文藝篇』47(2005):23-35参照。
- 7 同様の言説は、Chester と Norfolk の息子たちが Canutus から虐待を受ける際に発する “Oh England, never trust a foreign king.” (2.3.729) という台詞にも確認することができる。さらに、1590年前後に作劇されたイングランド史劇にこの種のメッセージを見出すことは容易であり、例えば *The Troublesome Reign of King John* (1588) や (年代的には少し後になるが) *King John* (1596) の大団円の台詞を指摘するだけで事足りるのである。
- 8 Raphael Holinshed, *Holinshed's Chronicles: England, Scotland and Ireland*, ed. Vernon F. Snow, Vol. 1 (New York: AMS P, Inc., 1976) 725.
- 9 *Edmund Ironside* の劇作家が、こうした大胆な改変をもっともらしく見せるために彼なりの努力をしていることは、言うまでもない。軍隊同士の戦闘であったアシンドン戦を国王同士の一騎打ちに変更し、体格的に勝っていた Edmund の勝利を受け入れ易くさせるという材源の情報を利用すると共に、Edmund 王と臣下・人民との関係を注意深く描き出す。例えば、決闘直前の Edmund に向かって先王の王妃 Emma は “Will you on whom the state doth sole depend / our welfare, all the realm's, your friends, and kinsfolk / hazard the loss of all upon the chance” (5.2.1935-37) と呼び掛け、国家の象徴としての国王像を明確にする一方、兵士や民衆に配慮を怠らず人民からも敬愛される Edmund の姿を劇作家は描写する (1例として、第1幕第3場における、兵卒たちの給料や支給品を横取りする隊長に対する Edmund の激しい怒りを参照)。このようなイングランド王表象は、Canutus に対する突然で唐突、かつ物惜しみしない分割提案の衝撃をある程度は和らげるものと考えられる。
- 10 Ribner, 241.